

12
月号

第323号

いっしん

平成23年(2011年)

我があるを
神の恵と
知れる身は
礼びと詫びの
外に言なし
安武松太郎
御歌

発行：金光教加治木教会 〒899-5213 鹿児島県始良市加治木町朝日町130 発行責任者：矢野文枝 TEL 0995-62-2895
Mアドレス konko.m.kajiki@ksj.biglobe.ne.jp ホームページ http://www.7a.biglobe.ne.jp/~konkokajiki



青年会玉串奉奠



前日御用



前日御用



少年少女会玉串奉奠

加治木教会 生神金光大神御大祭 仕えられる

秋も深まる、十一月六日(日)加治木教会では、生神金光大神御大祭が仕えられました。

前日は朝から、掃除や小旗張り・下足箱・直会の下ごしらえなどの準備御用が進められました。御用奉仕者は、都合のつく時間帯に御用をおかけ頂き、夜勤明けの朝早く御用される方もあり、家で前日から仕込んで調理をして教会へ持ってこられる方もあり、それぞれができる御用を真心でおかけ頂いてありました。

当日は、天気予報は雨で早朝まで雨が降っていましたが、その後は一日中清々し暖かく初秋の九月に逆戻りしたかのようなありがたい一日でした。

講師は宮崎県高千穂教会長 田中道守先生でした。先生は、お道の御用をさせていただき、今日まで三人の師匠に出会い、それぞれから大切なものを教えていただかれた、その内容についてお話しされました。加

※全国信徒会 西南ブロック研修会の講話のつづきは、次号に掲載の予定です。

治木教会

生神金光大神御大祭 教話

講師 高千穂教会長（宮崎県）

田中道守 先生

平成23年11月6日(日)



「疑いを放れて広き真の大道を開き見よ。わが身は神徳の中に生かされてあり。」

「神はわが本体の親ぞ。信心は親に孝行するも同じこと。」
（御神訓・道教えの大綱）

はじめに

本日は教会長先生ご祭主のもとに当教会の生神金光大神御大祭がお仕えになられありがたいことに存じます。

皆様がこうして、ご都合お繰り合わせの大みかけを頂いて、健康と、道中無事安全のおかけを頂いて、ここにお参りができているのであります。

今年の夏、小林に行きまして、私方の子どもがバスケットボールをしている関係で試合に行きました。

すると帰りに、大雨となり高速度路が通行止めになりました、えびのから帰られなくなり、ぐるぐる遠くを回って帰ったこともありました。

人間というのは、なかなか思うとおりにいかないものです。思うとおりのおかげを頂いているから思うとおりにいくのです。

そこるところをほんとうにわからせてもらうと、有難いことになると思います。

シツカリ稽古

何でもシツカリ稽古をしていないと身につきませんが、シツカリとはどうすることでしょう。

バスケットボールのことになります。宮崎県では小林高校と延岡学園が双璧です。

小林高校に練習に行きますと、一軍、二軍、三軍とありまして、一軍は私たちと会うことはありません。三軍と試合をさせてもらいます。

中学生を相手に、小林高校の三軍

が試合をするのですが、実に上手です。背が低い人が多いだけですが上手なのです。その三軍が試合をさせてもらうのです。

石川先生という方が指導しておられます。一般の国体では宮崎県チームの総監督を延岡学園の本郷という先生で、その下にコーチとして小林高校の石川先生が指導しておられました。

この石川先生は、全日本クラスの選手も指導されるくらい先生です。その石川先生が、うちの高千穂中学の弱いチームと練習試合をしているのですが、高校生でも失敗をする子がいます。

教えられたことが身に付いていないから、とっさのときの動きで戸惑い失敗をするわけです。

そういう子たちが失敗をすると、ストップをかけられます。

すると、サツと先生のところ集まってきて、先生が言われるには「お前たちは練習試合をしているのか？」と。

実際は、中学生対高校生の練習試合なのです。向こうは高校生では

かに上手なのですが一生懸命しているのです。うちの中学生の方がダラッとしています。

不思議なことに、下手なほどダラッとしています。

さらに言われるには「お前たちはそれで九州大会に行くつもりか」と。その選手たちはほとんど試合には出ないのです。「出ることができない選手になるつもりか」という意味なのです。

「練習試合ならもうするな、ほんとうの試合をしていると思っしてしないでどうするか!」と言われるのです。

やはり一流の指導者だなと思いました。

このようなことは、延岡学園の本郷先生もそうです。練習のときはほとんど座っておられます。

ときどき選手を集めて小さな声で何か指導されるのです。選手たちはその小さな声を聞き逃さないのです。その小さな声で何かを言われたとたんに、体育館のバスケットコートでの動きが変わるのです。

それで、それぞれの選手が本気で

自分のプレーをしていくのです。驚くほどです。

信心の稽古はどうしたらいいのでしょうか。

教会でみ教えを頂きますが、それをどのように頂けばよいのでしょうか。

品物ならば、持って帰ればよいのです。

しかし、御大祭でお礼・お詫び・お願いをさせてもらって、その内容を心に刻んでチャーンと持って帰れていますか。

心に刻まずに、置いて帰る人が多いのではないのでしょうか。

「あーいい話だった」だけでは、家に帰ってから何も役に立ちません。家に帰ってからほんとうの稽古をしなければならぬのです。

本舞台は、家であり仕事場です。

本舞台できれいに舞うことができるように努めることが要ると思います。アー今日は上手に舞えなかったな ということもある、そこを重ねて稽古して行くことが大切です。

今日、お祭りで奏上されました祭

詞(のり)とでも、大切な内容が奏上されていたと思います。

私は「詫びても詫びても詫びたらす」というところを皆さんがどのようには聴いてあるだろうかと思えます。祭詞は親先生が奏上してありますが、ほんとは 自分に代わって親先生が奏上してくださっている と思う必要があるのです。

親先生だけが詫びなければならぬ、至らないところがあるのでないのです。

みなさん一人一人のことを一緒に心の中に頂いて、神様にそう仰って下さっているのです。

あそこは私のことだ 私のこういふところのことだ と思う必要があると思えます。そういう頂き方が大切と思えます。

それが、本気で稽古をさせてもらうためには必要なのです。何となく、という気持ちではいけないと思います。

一人目の師匠

私には、このお道の中で大きく言っつて師匠が三人います。

その一人目は父です。

私の出身は、山口県の宇部市と山陽小野田市の境に、厚南(こうなん)という地区があり、そこに厚南教会があり、その厚南教会の次男です。

父に反発したこともずい分あります。大学に行つて大学院に行つて、大学の先生になろうとして、講師の口まで頂いていました。

すると神様から、大叱られというようなお気付けをいただき、目が覚めました。

そのときの父と母が、何も愚痴を言わず スゴイなー と思い、その態度こそ素晴らしいことと思ひました。

そして、その翌年、金光学院に入學しました。

金光学院に入るまでに、父はいろんなことを教えてくれました。

中でも、御神飯の炊きや器などの洗い方は特に丁寧に教えてくれました。

御神飯のお米をとぐのは、たいいてい前日の夕方なのです。なぜかと言いますと、そこは西陽が入る部屋で、西陽が当たるために電気を点けませ



ん。

「お前が洗つてみる」と言われ洗いました。洗つてから、水の量がわかりにくいので電気を点けますと、もったいないと言つて消されました。

西陽だと鍋の中が影になつて見えないのです。ところが父は「鍋の蓋で西日を反射させて見ればよい、してみろ」と言つのです。

するととはつきりくつきり見えるのです。ハーツ、そうなのか と思つてみると、そこで父は「信心は何事も自分から練り出さなんといかん、これから学院に行くけれども、ただハーツと聞いておくだけではいかん、いろんなことを聞かせていただいたところから、自分なりに考えて行くようなところがいいといかん、一つ一つがそつだぞ、一事が万事」といふると教えてくれました。いわば「本気でほんとの試合をせよ」ということなのです。

また「自分が学院時代は、奥津城に上がるところの石垣がコケで汚れていたから朝早く起きてきれいに掃除をしていた」と話していました。

ですから、私も教祖様の奥津城のみ扉を金光様のお出まし前に、毎朝研かせていただきました。きれいな、乾いた雑巾で拭かせていただいています。

すると、その後にある方が掃除をされるのです。そのために、ある口うるさい方が「あなたが掃除した後、また掃除をされるからその人のためにしないで下さい」と言われるのです。

しかし、私は「私がして、さらにその方がして、何度させていたいてもいいんじゃないですか」と、私は父からそのように習っていますから。

何回させてもらつてもいいのです。教会での庭の掃き掃除でもお広前の拭き掃除でも、みんなそれぞれの真心から出る神様・教会への思いですから。

自分達は、ここで信心の稽古をさせてもらつんだ、教会は道場なん

だと、また、言われてするんじゃないのです。

そういうことも教えてくれました。

父について

父の生家は、山口県の宇部市に厚東(こうとう)というところがあります。そこで貧しい家ではありませんでした。

室町時代大内氏が中国地方を治めており、その配下に厚東氏という豪族がいます。霜降山(しもふりやま)というところにお城を構えていました。

その城下に温泉がありまして、そこを持世寺温泉(もせじ温泉)といいまして、そこ一帯に厚東氏の配下の武士で原田氏(はらだ)という一族が住んでいました。

その地域の姓は、みな原田です。父も原田で、私の旧姓も原田です。

私の中学校のとき、校長先生も、教頭先生も、英語の先生も、保健室の先生も原田という先生でした。

また、この保健室の先生は、小学生のときに近くを流れる厚東川(こうとうがわ)が氾濫(はんらん)して洪水(こうずい)が出て流されているところを、一級上の私の父が泳いできて助けてくれたと話して下さったこと

がありました。

みんな、その持世寺(もせじ)というところの人なのです。

その持世寺温泉(もせじ温泉)の元湯(もとゆ)が父の祖父の里(さと)です。そして祖父が家分(かわけ)れをするときに、田畑(いり)一町歩(いちまちぶ)と山なども頂(いただき)いて相当財(ちやうたうざい)があったそうですが、次の代(よ)にそれを皆切り売り(みなきりうり)したそうです。

それは、父の父は生まれながらに足に障害(しょうがい)があり、その治療(ちりやう)のため、また、湯屋(ゆや)をしているとお妻(おつま)さんを持つ(も)つことが多かった(お)そう(そう)で、さらに、本妻(ほんつま)は外(ぐわい)に出て行き妾(めかけ)さんが家(いえ)に入(い)ってきていた(お)そう(そう)です。

そうして、足の悪い父(ちち)の父(ちち)は毎日(まいにち)お酒(お)ばかり飲(の)んでいた(お)そう(そう)です。そういう中に、父(ちち)は中学校(ちゅうがっこう)に行(い)か



せてもらい修学旅行(しゅうがくりょ)に行くのに、竹(たけ)で貯金箱(ちりづきばな)を作(つく)って、周囲(しゅうい)の家の薪(かまど)を取(と)ってくるなどして、旅行費(りょんひ)を貯(たくわ)めていた(お)そう(そう)です。

そうして明日(あした)旅行費(りょんひ)を持って行くという日(ひ)になって見(み)てみると、風呂(ふろ)の焚(たき)き口の(くち)ところ(ところ)で割(わり)られてしま(ま)っていた(お)そう(そう)です。

家(いえ)の中では、父(ちち)親(ちち)がそのお金(お)で酒(さけ)を買(か)ってきて飲(の)んでいた(お)そう(そう)です。父(ちち)親(ちち)に竹(たけ)の貯金箱(ちりづきばな)の(の)こと(こと)を尋(たず)ねると、怒(いか)って起き上(お)が(が)ってきて草刈鎌(くさきりかま)で叩(たた)かれた(お)そう(そう)です。その傷跡(きずあと)が父(ちち)の頭(かぶ)に残(のこ)っています。

しかし、私(わたし)の父(ちち)はその後(のち)、そのこ(こ)とに對(たい)しあまり文句(ぶんぐ)を言(い)っておりま(ま)せん。

父(ちち)は五人兄弟(ごにんけい)で下(した)から二番目(にばんめ)で、ほかの兄(あに)は皆(みな)出(で)て行(い)った(お)そう(そう)ですが、下(した)に残(のこ)る弟(あに)のため家(いえ)のため(ため)に、父(ちち)は職業軍人(しごくせんじん)とな(な)って家(いえ)にお金(お)を送(おく)って(お)いた(お)そう(そう)です。

父(ちち)は生真面目(なまごころ)なので、生涯(しやうがい)職業軍人(しごくせんじん)で通(とお)す予定(よてい)だ(だ)った(お)そう(そう)です。

何でも一(いち)生懸命(せいけんめい)にする性格(せいかく)でした(お)ので、それが認め(と)められて横須賀(よこすか)の大船学校(おほふねがっこう)で学(まな)ぶこと(こと)になり、後(のち)に呉(くれ)の人間魚雷(にんげんうずらい)を作(つく)る工場(こうじょう)で指導(しうど)をして(お)いた(お)そう(そう)です。

近くの広島(ひろしま)に原爆(げんばく)が投下(ていげ)された後(のち)、間(ま)もなく終戦(しゅうせん)とな(な)って、歩(あ)いて故郷(こきやう)

に帰ってきたそうです。
 そういふ父が、母との結婚で金光教に出会うのです。

父は戦後、三年間会社勤めをして
 しています。給金はすべて家に入れ、
 家を支えたそうです。

その頃父は、将来大きな仕事で
 できるようになりたいと心に抱くも
 のがあつたそうです。

そのとき、勤めていた会社に、長
 門船木教会の熱心な信者さんで、渡
 辺さんという方がおられました。

その方から「原田さんいい人がお
 るからお見合いをせんか」と言われ、
 お見合いに連れて行かれるときにな
 って「お見合いの前に寄る所がある、
 そこで得心がいったら合わせてや
 る」と言われて、長門船木教会に連
 れて行かれたのです。甘木教会の出
 社教会です。

長門船木教会には田辺増實(たべますみ)
 という先生がおられました。

お結界で「この道の神様は天地金
 乃神です」と教えられたのです。

うちの父は生真面目で、これとい
 って勉強はしていませんから、聞い

た教えがスーッと心に入つていった
 のです。

父は 将来大きな仕事をしたい
 という思い以外の邪念はなく、この
 神様に取り縋つたら大きな仕事で
 できる人間にならせてもらえらるだろ
 うと、思つて「はい、信心させて
 もらいます」と言つたそうです。

それで、お見合い相手に合わせて
 もらいました。お見合い相手は、長
 門船木教会の総代をおかけ頂いてい
 た女性の娘でした。それが、私の母
 です。

詳しいことを話しますと長くなり
 ますので、少し間を端折りますが、
 父たちは結婚して信心を進め、修行
 に上がりお道の教師とならせていた
 だいて、厚南に布教に出させていた
 だきました。

父は、若くして職業軍人になつた
 ので、あまり勉強はしていません。
 無学と言つていいほどです。そうし
 てお道の教師になつたのです。

あるとき、山口県西部連合会の教
 師会で、長門船木教会の田辺増實先
 生が、ある先生から「あなたは、何

であんな金光教の教師にふさわしく
 ない人を金光教の教師にしたのか、
 私たちが恥かしくてたまらん」と言
 われたそうです。周囲にいる先生方
 もそう言われたそうです。

その教師会の帰りに、田辺増實先
 生は、帰りの途中にある厚南教会に
 寄られて、そのことを仰つたそうで
 す。口数の少なく実直・頑固な田辺
 増實先生が顔を真っ赤にして「何で
 も貰けば真ではないか」と仰つたそ
 うです。

私の父は、天地の賜物を粗末にし
 ないことに心がけ、それを実直に守
 ることを実行していたのです。

父は、食事のとき、カレーなどは
 皿に残つた最後の残りを指でなぞつ
 て頂くこともありました。そういう
 ことをよその先生方の前でしたのか
 も知れませんが。

煮魚を頂くときには魚の身を頂い
 た後に、白湯をかけてわずかな残り
 身や塩気を無駄にしないようにと飲
 んでいました。

母も「先生それは恥かしいです、
 止めてください」と言っていました。
 父はそれを止めるのではなく、ど

うしたらいいかを考えていました。信心を自分から練りだしていたので

す。
私が金光学院を出て、教学研究所に入り、お下がりをおい、いわゆるお給金を頂くようになって、両親が御本部に参拝してきたときに、食事に連れて行くことができました。

父は、カツカレーが何かを頂いた後に「そのパンを少しくれんか」と言うので、パンの切れ端で皿に付いたカレーの残りを拭いて頂きました。

父は、今もいろいろと考えてこんなふうになっているのか、と思いましたが、

父は、生活の中、家の中のいろんなところで工夫して、天地のお恵みを粗末にしないよう無駄のないようにしています。

そのような父が、第一番目の師匠です。



二人目の師匠

二番目の師匠は、金光学院時代の学院長先生です。

内田守昌(京都府太秦^{うづ}まき教会)とい

う先生です。思わぬ早いお国替えでありました。

私の父と学院が同期生で、同室だったそうです。内田先生は京都大学を卒業されて本科ですから在学は一年で、私の父は別科ですから半年間の在学でしたが、なぜか仲が良かったそうです。

また、内田先生は北京大学にも在学してあります。しかも、戦時中で中国人は日本の憲兵から辛辣な扱いを受けているときですから、とても大変だったということですが、

いろいろな状況の中で、勉強をされ鍛えられておられます。

この内田先生が、学院時代に純真い私をよくフォローして下さいました。

私はあるとき、命のあるものを大切にしなければということを考えすぎて、草一本引けないようになったことがありました。今考えるとバカなことのようにありますが、

そのことをレポートに書いた後、内田先生は、それではモノにならないということ、草取りをさせてもらうときに、これから草取りをさせて

もらいます、と神様にお願ひさせてもらうだろう、そのときに自分の心がどういう心になっておるか、これから抜かさせていただきます、ということになったら、その心が全部になつておらねばならん、そうすれば何も考えない、後はひたすら抜かせてもらおう。ひたすら抜かせてもらったら、後は、有難うございました、と自ずと出るはず、それが大切、私はそう思うがな」と、お話し下さいました。

私は悩みに思うことを次から次に内田先生にお話しするようにになりました。そうして、一つ一つ教えて下さいました。

また、学院時代に五枚以内で提出するレポートを、授業を休んで夜中も自習室にこもって書き続けて五十枚書きました。

すると腕を痛めて腱鞘炎になつてしまいました。

あげくの果てに提出した先生からは、一枚目に赤字で大きく、「違反」と書かれましたが、「その努力は認めてやる」と書かれましたのが救いでした。

内田先生には、いろいろなことをたくさん教えていただきました。

学院を卒業する前に、内田先生からマゴノテのフワフワするところで頭を何度か叩くようなまねをされて「お前は鈍感だから急くなよ、急くなよ、お前は何でもそんなに早くできる人間ではない、だからとにかく地道にシツカリおかげ頂かねばならん、それを忘れるな」というみ教えを頂きました。

私はオッチョコチョイでいろんなことがわからなくなってしまう。そういうことをみ教え下さったのだと思います。

内田先生が早くお亡くなりになられてとても残念に思っています。それが私の二人目の師匠です。

三人目の師匠

三人目は甘木の二代親先生です。

長門船木教会が甘木教会の出社教会で、その子教会が厚南教会で、孫教会になるため甘木教会にはお参りしたことはありませんでした。

甘木の親先生には、お会いしたこともありませんでした。

私が研究所にいるときに、兄夫婦が、長門船木教会では修行ができないので、そのまた親教会の甘木教会へ修行に上がらせてもらいました。

その後、兄夫婦に長男が生まれましたので、お盆休みに顔を見に行かせてもらうと電話をしていました。

すると、兄から連絡があり「甘木の親先生が、甘木教会に来たならば応接間に通るように言うておいてくれ、とのことだから…」ということでした。

お盆休みに、両親と一緒に甘木教会にお参りしますと、応接間に案内されて、親先生と親奥様が来られて「加治木教会に養子に欲しいという矢野政美先生から、長門舟木教会を通してのお話しはどうなっておりますじやろうか」と尋ねられましたので、「あのお話しは断りました」とお答えしました。

すると「今、修行生にとっても良い娘があるのじゃが、今から呼ぶから」と、そうして「開拓布教に行つたと思つて結婚せんか」と仰つたのです。

初めてお会いした二代親先生からそう言われたのです。

両親は、長門船木教会の親先生のためには身を粉にしてでもという思いがあり、その親先生の大切にされる親先生からのお言葉でした。

そうしたところに本人が来まして、二代親先生は「これは、父親と母親の良いところをもらつておる、どうか、結婚せんか」と。

本人とは、私が研究所にいますときに、学院で助手として御用をしていた時期があり、同じバスケットチームで一緒になり、二度お話しがありました。断っていました。

三回目に二代親先生から言われて、素直に「はい、わかりました」と、素直にうなずいてしまいました。二代親先生のお徳でしょうね。

それで、甘木教会に修行生として入らせていただくことになりまして、二代親先生からいろいろなことを教えていただくこととなりました。

四時の御祈念で、修行生が順番でお話しをします。また、朝の御祈念で親先生が質問をされることにお答えするので。

私がつまらぬお話しをするのですが、その一字一句よく聞いておられ



に取るように教えて下さいました。

御本部の教学研究所では、教祖様に「様」をつけることや、人の名前に敬称をつけて呼ぶことはありませぬ。いわば呼び捨てです。それは、研究の上で色を付けないためです。

そういう表現をするたびに「それじゃ勿体ないじゃないか」と仰るのです。

教えてもらいながら、私は反発もするのです。

あるとき、私が「感無量」という言葉を「かんぶりよう」と話していますと「なあ原田あれば、かんむりようじゃないか」といえ、かんぶりようとも言います」と言いますと「わしゃ、かんむりようと思つがな」と仰るのです。

それでも「そんなことはありません」と言い、私は広辞苑を調べて持

て、呼び出されて「原田、あのと

ころいう言葉遣いをしておったが、それじゃ勿体ないじゃないか、違うじゃろう」と、手

つて行き「ここにころ確かにあります」と言いました。

すると二代親先生は「そういうことじゃない」と仰るのです。

それでも、そのことがわかりませんでした。

最後に、家内を呼んで「道守はどうしたらいいかな、どうもあれは素直じゃない」と。

それを家内から聞いて、思いつくことがあつたのです。

それは、長門船木教会の初代が、直腸癌をおかけ頂かれたことがありまして、それから十年の命の接ぎ穂を頂かれ、その間にたくさんの方がおかげを頂かれました。

そのときに、ある教会との間で、信者さんが長門船木教会に移つてこられた方があつて問題となり、甘木の初代親先生のところに言つて行かれるということがありました。

そのすぐ後に、長門船木教会の初代が甘木教会に参拝され、初代親先生のところへご挨拶に行かれると「...そういうことがあつたげな」とのお言葉でしたが、長門船木教会の初代は何も言い訳をせず、ただひと

言「相すみません」と、言われただけだったそうです。

そのことを思い出したのです。

あー、このことだな、言い訳をしないということを見せて下さつてあるんだな、神様の頂き方、右と願つたことが左となつても、どつちとなつてもおかげなんだ、それがわからんとほんとの助かりの信心はできんぞと教えて下さつてあるんだなと、ようやく思えたのです。

甘木教会には、七年間修行生として置いていただきまして、三番目の師匠、二代親先生からは、最も大切なことをいろいろと教えていただきました。

さいごに

「お礼が六分、お詫びが三分、残る一部がお礼」という、甘木親教会初代親先生のみ教えがあります。

「お礼」というのは「報恩」であり、「ありがとうございました」で済みますのではなく、行為で報いるのであり、それは神様の思いに適う信心生活にならせてもらうことで、これは人が助かる生き方をさせていた

くことだと思えます。

「お詫び」の「改まり」ということですが、「改まり」というからには、自分の姿をシツカリみ教えに照らし合わせて、本気でみ教えを頂く稽古をさせていただいて、改まらせていただくことだと思えます。

「お願い」ということは、信心というよりも、神様に苦勞をおかけすることです。神様が私たちのために、「コキ使われる」ということはおかしいでしょー?!

「報恩」と「改まり」の姿があれば、その姿になれると思えます。

みなさんのご信心で、今日お話しさせていただいたことの中から、大切なところをすくい上げて、お役に立てていただければ有難いことと思わせていただきます。有難うございました。

「疑いを放れて広き真の大道を開き見よ。わが身は神徳の中に生かされてあり。」

「神はわが本体の親ぞ。信心は親に孝行するも同じこと。」
(御神訓、
道教えの大意)

【おわり】

人吉教会

布教百年記念大祭

うるわしく仕えられる



秋も深まる十一月三十日(日)人吉教会では、布教百年記念大祭が、甘木親先生(ご祭主)のもと仕えられました。教会長先生はじめ、ご縁のある先生方や信奉者の皆さんが、前々からいろいろな計画と準備を進められ、麗しい百年のお祝いとなりました。教会長先生の甥子で初代の孫に当たられる、人吉市長さんも参拝され玉串を奉奠されました。ご教話は、親教会 甘木教会長 安武道義先生でした。

お直会宴は、これも教会長先生の甥子さんの経営される「アンジェリク平安」という立派な結婚式場で和やかに開かれました。

鹿児島教会

布教百十五年記念大祭

行徳照真大人 五年祭

仕えられる

秋も深まる十一月二十日(日)、御大祭・記念大祭のご祭主は若先生の真一郎先生、行徳照真先生の五年祭のご祭主は福岡教会の吉木先生が、お仕えにられました。

ご祭典後、現鹿児島教会長 喜世子先生の甥にあられる、落語家の桂かい枝さんによる落語(奉納演芸)がありました。英語落語で国際的に活躍中の落語家の、洒脱なお噺を楽しませていただきました。

偲びのご教話は、久留米教会長 石橋先生でした。

ご教話後、直会宴が開かれ青年会・壮年会の皆さんによる愉快なダンスや、婦人会全員による「おはら節」総踊りなどがありました。



多良木教会

布教七十五年記念大祭

うるわしく仕えられる

秋も深まる中、人吉盆地の東に位置する多良木町にある、多良木教会では十一月十三日(日)布教七十五年記念大祭が仕えられました。



ご祭主は、甘木親教会 安武道義親先生で、ご祭典中の祭詞(のりと)にて、多良木教会初代教会長 北御門イサ工先生ご布教より今日までのおご苦労の足跡をたどられ称えられながら親神様・教祖様にお礼を申し上げられました。

ご祭典後のご講話は安武道義親先生で、尊い教祖様の真の道が正しく広く伝えて行かねばならないことなどをお話しにられました。

ご霊神様のおまじり

十二月

- 吉屋正憲 之霊神(2日) 平成11年
- 本中野キン 之霊神(7日) 昭和10年
- 小屋敷シゲ 之霊神(7日) 平成8年
- 柳園市次郎 之霊神(8日) 昭和25年
- 本中野重盛 之霊神(8日) 昭和39年
- 徳永盛常 之霊神(18日) 平成2年
- 吉屋キミ 之霊神(30日) 平成22年
- 前田キミ 之霊神

ご先祖の霊神様の、現世・幽冥(かくりよ)でのお働きあつての今日の私たちであります。立日の月には、故人を偲び、玉串を奉てんしてお礼を申し上げます。教会では、十日の月例祭で、霊前での玉串の奉てんを準備しています。

宮之城教会

布教五十年記念大祭

うるわしく仕えられる

朝夕はずいぶん冷え込むようになつた十一月二十三日(祝)、宮之城教会では布教五十年記念大祭が仕えられました。

あしあと

加治木教会行事記録

11月

- 1(火) 報徳月例祭 10時半
- 5(土) 加治木教会御大祭前 御用奉仕
- 6(日) 加治木教会御大祭 11時
- 9(水) 斎掃御用 10時
- 10(木) 生神祭 月例祭 10時半
- 12(土) 大口教会御大祭 12時
- 13(日) 多良木教会75年記念大祭 11時
- " 西鹿児島教会御大祭 12時
- 17(木) 連合会執行部会(加治木) 10時半
- 19(土) 斎掃御用 10時
- 20(日) 鹿児島教会115年記念大祭 11時
- 併せて 行徳照真大人(五年祭)
- 21(月) 月例祭 共励会 13時半
- 23(祝) 宮之城教会50年記念大祭 11時
- 25(金) 中村正行大人(五十日祭)
- 26(土) 27(日) 信徒会教区委員会
- (日田教会にて上田和也参加)
- 30(水) 斎掃御用 10時



松井茂喜教会長先生がご布教になられて半世紀を迎え、天気予報では雨模様となつていたのですが、幸いにも好天気に恵まれ麗しいみ祭りが、甘木親先生ご祭主のもとに仕えられました。

十二月四日(日)

出発午前七時 帰着午後六時頃の予定

甘木親教会

生神金光大神御大祭参拝

十二月二十二日(木) 十七時より

少年少女会・信徒会

歳末感謝パーティー

会費：大人1000円・中学生700円・小人400円

…の予定です。(今のところ)

十二月三十日(木) 十三時半より

加治木教会

越年祭 祭奉行

越年祭、御礼・お願いの記入用紙を
ご記入の上、御結界にお届け下さい。

一月一日(祝) 正午より

加治木教会

元日 祭奉行

〔祭典・教話後、福引。〕

※親教会、隣接・関係教会の御大祭や
記念祭に参拝させていただき、ご
教話を拝聴させていただき、御用を
拝見させていただき、信心の勉強を
させていただきますように。

教会行事

12月

1(木) 報徳月例祭 10時半

3(土) 甘木親教会御大祭 第一日

4(日) 甘木親教会御大祭 第二日

9(金) 斎掃御用 10時

10(土) 生神金光 月例祭 10時半

11(日) 御本部布教功労者報徳祭 選擇 10時

吉屋家霊祭

15(木) (連)布教協議会(加治木) 10時半

21(水) 斎掃御用 10時

22(木) 月例祭・共励会 13時半

感謝パーティー 17時より

青年会忘年会 20時より

29(木) 斎掃御用 10時

30(金) 越年祭 13時半

少年少女会、青年会、若婦人会は、都合により日
程を変更することがあります。随時連絡しますの
でお気をつけ下さい。

一月五日〜二月四日

寒中一斉信行

ご祈念・研修：午前五時二十分・午前十時
ご祈念のみ：午後四時・午後九時

平成二十四年

1月

1(祝) 元日祭 正午

3(火) 甘木親教会年頭参拝

5(木) 少年少女会 10時半

9(祝) 斎掃御用 10時

10(火) 生神金光 月例祭 10時半

13(金) 若婦人会 13時半

17(火)〜18(水) 連合会執行部会(志布志教会)

21(土) 斎掃御用 10時半

22(日) 月例祭・共励会 13時半

青年会 20時

26(木)〜28(土)

少年少女会連合本部 理事会

29(日) 連合会定期総会(鹿児島) 10時

31(火) 斎掃御用 10時半

一月五日(木) 十時半より

少年少女会

七草祭(鏡開き)